

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color

Black

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

繡史 恋勇

睡月夜物語

四

新五口番
五口番

遠近
1850
4



1850
4

明徳堂

柳浪陳人
著述

朧月夜香繡史卷之四

○雨やどり

浪花 柳浪陳人 著述

播磨より都方へ往還廣峰越とつゝ置鹽の城下の小畔よあふれろ
廣峯を越えて有明山高の嶺を歴丹波を盤して下嵯峨は出
最峻嶮と山徑なり。那廣峰ハ山の形勢十分猛悪根ハ地角を盤
頂ハ天心を種と遠眺りバ雲根を磨斷し。近く看をバ月魄を
吞吐と。深嶺幽谷のうらほねは雲霧を罩て奥のかざりかま
ど。後面ハ但馬丹波の君羊山入交まうこと恰も犬牙のごとし。こても
之助ハ宇幾田の邸の懸寐も阿漕が浦の度かこふり。人ハ志しと浮
来て翼瓜比へ枝を連ねかこれまうし。幾んどふ。巫山の春夢一

朧月夜香繡史 四

たびやぶまき破忽地刑部どのの下の討るべくしと。夫人清見
の前の大庇よて。からと路命を助くる。長く水といたのまふどと。
醫の死と風よとらまゝとちして。とと。其場がのうま出とと味
道い又い。鬼一口の怖もあま。嚮導をたのむ可内を落とるの
か。よ。よ。い。る。を。か。ら。り。ま。は。る。饒問の早路後方は。星。お。よ。只。簷。か
小向つて。き。り。り。る。狂。ふ。く。か。の。廣。峰。の。麓。た。ど。り。つ。と。ぬ。こ。の。時。と。や。己
牌下よと看く。山。靄。八。重。よ。と。ら。り。東。西。已。ん。え。ず。な。り。雨。と。え。が
ち。茶。つ。と。ら。ぬ。ど。よ。猿。い。お。憂。ふ。う。た。が。上。よ。憂。か。累。ね。ほ。く。と。こ。つ。い
屋。も。ほ。辛。じ。て。一。個。の。茶。店。た。び。ひ。り。各。床。ル。は。尻。う。け。て。い。と。た
年。飯。と。喫。り。あ。や。し。の。義。兵。購。得。て。と。の。こ。れ。と。う。ら。着。羊。腸。と
攀。躋。行。と。一。里。ぐ。り。雨。ハ。盆。か。傾。く。る。う。て。く。山。嵐。い。よ。吹。き。こ。う。と。

忽地とは寅よ吹とらま。主後大童とふり。遍身ハ一索よひとぬき。
塩よれまさら。ら。ち。さ。か。と。登。か。ら。に。物。か。く。ゆ。け。ど。り。した。煙。霧。濛
濛として。咫尺よふと。ひ。あ。い。れ。ま。の。ぐ。と。樹。下。も。い。か。と。や。遊。ご
は。く。ゆ。ひ。し。た。だ。る。い。つ。う。反。ら。く。な。り。ふ。ら。い。や。黄。昏。ふ。ら。う。づ。れ
け。ら。し。偶。と。對。面。の。一。い。ら。ど。ら。た。り。林。子。の。裏。より。柴。の。戸。め。ら。ら。と。あ。る
が。曲。突。の。火。あ。り。ほ。の。え。ゆ。く。ふ。ぞ。え。い。や。つ。と。の。が。こ。し。は。と。て。庶。下。小。た。ち
も。と。と。り。て。ん。ま。い。せ。山。守。が。伏。家。と。お。ぼ。く。八。重。葎。ま。ひ。衣。だ。と。う。る
黄。土。小。屋。ふ。り。草。宇。う。り。滴。溜。く。と。と。る。兩。脚。の。と。玉。簾。を。ま。せ。り。ける。
葛。蔓。の。狼。藉。よ。こ。ひ。ま。と。ひ。て。壁。ハ。と。て。額。が。ち。よ。裏。頭。いた。煙。煤。も。て
塗。り。たる。が。お。く。物。の。り。や。と。う。ら。げ。簷。端。は。赤。紙。の。注。連。う。ら。し。し。も
あ。や。し。ご。ん。バ。容。易。よ。ぼ。も。入。ら。で。は。張。け。バ。一。個。の。老。婆。眉。よ。八。字。の

霜しもぬおき、頭かぶの毛けハ佐野さのの白草しろくさぬかささごせらぐでく。及眼あふみの光ひかりハ
小塩こしほの鏡かがみぬ磨とぎとてたる。小こ笑わらふらす。身みハ一套いちまの披綴ひづれぬ着きて采さい
ひりくべは、茶ちやのト焚たきふら口裏くちらより草烟くさけりぬ吐はきくる。そのさまはねお
らす。婆ばく人ひとくとゑるとひくく。突然とつぜんと戸口とぐちよりちりゆりて来き。
可内べくちちりごととと、えらうへと惱せまげよつあやうハ。吾われ們らハ行活ゆきごとの客きやくなる
が。この驟雨あまふりよいであひべとゆとあやま今いまハ一歩いつぱもこめがしだ。望のぞ望のぞ
らくの雲くも時ときの傘かさ舎やとふどとゆるされよ。裏面うらめんぬかりて歇息やすみた。こころ
かく後ごとむむバ那老なろう婆ば霜眉しもまゆ目め蚤いばぬ起おこしとと。鈴すずなす眼まなこハ稜かど
たて長ながやうふる。一ひと把つかの竹箒たけわらとと。戸との口くちを斜よこ小こつと。そいざと。い
うふとや。頂吾このうらうら家のうま孩兒こゝろ痘うぶを患や。明今あけ起脹おこのなか中ちゆうなる。這里こゝの習な
俗うくも。痘うぶの神かみ生な人ひとぬ忌いたやふとつりうぐ。足下あしもとたちのこせらふ。い

猛ま痘うぶ兒こぬあやしとまで大熱おほあつまういでつ。春族はるうく人ひとぶららむ。這
里こゝぬ去さると半里はんりあやうはして。鋸阪のこざねとつて唐猫からねこ谷やの破やぶ口くちぬさる。だ
小村こむら落おふまバ人ひとぬ止とどむ宿やどもあるよ。じぶが裏うらハまやどりひかるふまじ。
とろし去ままよと。皺洞しわなとろく。劔けんはいと膠ねもふ。追おうま。燦きら助すけハ
進退しんたいとろ谷やまう。たぐ女むすめぬあもほふとつる。涙なみだぬきしてらひはく。
土風つちかぜとふらむ。理ことてふとど。俺おれく雨具あまがハもさす。脚あしハ傷やけ。半里はんりハあらう
一ひと歩ふぬさくひくことあ。りま。婆ばくは。倘佛たうぶつぬあ。バ。せめて這宇下このふ
アとも借かてたま。れ一ひと把つかぬま。ね。ほふ。深ふかさ。患やとちり。小こ屋や。可べ
内うちも。ろとも。小こ百ひゃく般ぱん語ごぬはくして。かげとことむ。まど。巴ま孫まごの。夢ゆめ
着きして。慳貪けんこん邪よこ險けん那老なろう婆ば。い。う。う。れ。を。う。け。ひ。う。と。ま。う。と。慳けん
痴ちる。面おもては。さ。して。と。い。う。う。バ。向方むかうふる。あ。の。赤あか兀くの。崖陰たけかげハ。山やま懐なごふる。巖いわ

廣氣越
助
風雨
宿
徳所



朧月夜戀香繡史 四

罅あひなる。溝いいころ。隙ひはまを。這くり。又また。別べ境けいふまを。痘い神かみの崇たかりも
つらじ。とく。那な里りへ。ゆれよ。斤いん時じて。這くり。あらる。ほしといひまらる。篋す戸どと
ハ。礎いと。局きょくて。ぐら。可い内ない氣き得えて。痴ちの。ぶくふらり。戸と口ぐちよらふらふらとを。
之この側かため。たたあらぶ。是せ非ひも。はしべふも。教しよる。せ。那な里りの。巖い穴あなよまつと。
てんてんららる。おおく。吾われ們ら。衣い皆みな濕し透とまらる。炙あ乾かんを。料りやうよ。世の。焚た我がと
ああままよよと。ひここと。かここに。洗けくも。非は。應へ。んせず。可い内ないが。れ
おおもも疑ぎせで。ず。と悲なむ。告る。はら。とま。し。かく。雨あ風かぜが。おりし。險けんと。坂さか路ろ
が。越来こはま。息いきが。づと。足が。おへ。ぎて。湛たんる。く。飢いよ。とへ。條を。たま。い。
竹たけも。もああまま。飢いが。凌へ。ともの。極ごく飯いも。もを。公や。今も。し。し。し。
ちちの。薪たき火ひともたたややひひね。鶴目めいいろろ不ぶも。まめめししと。へ。ぶぶと
ままききりりよよいい。ここの。時とき裏うら面めんより。二三さん人にんの。夢ゆめししと。こともかかりりと。まよよしした

鄙び萎わううか。ああちちんんどどももほほごごいいららいいととややくくととららららどどの。眼めよよおお見み
せんせんかかどど罵ののちちららけけくく。とと。乳う捧づくくとと。赤あか出でとと。とと。光あ景けいとと。戸との。透と
間まららううハハ。埴わちちああふふややああんんららもも。死しららるるよよどど。今いまハハ。兩りゆう人にんももいいららととて。
不ふじじしし力ちからととちちいいくくとと。ふふべべの。揖いが。と。紫むらが。ぬ。船ふねのの。ししてて。せせひひをを
其その所ところをを。たたららるる。おおぢぢままししとと。婆ばが。導しし。品かん窟くついいららるるにに。ああもも
かかとと。方かた二に丈じやうぶぶららの。洞やめめくく。所ところよよて。松しょう蘿らふふどど。生な下げももりり。黒くろ松しょうのの。ふふくく
たたくくははししたたが。脚下あしもとより。怪奇あやとと。傳でんてて。藤ふじ纏まと若わ封ふうてて。老らう龍りゆうのの。雲うんよよ。日ひ升のぼるる
かかとと。ううががいいまま。片かた側がたよよハハ。一いつ道どうの。溪たに水みづ漲なみららるる。落おちちてて。白しやく波は飛ひ逐しゆくく。王わう泚し湯たうのの
ぶぶじじとと。雨あめいいららるる。毛けのの。ごごとと。あありりししもも。今いまハハ。ままととしし。滑すべららるるのの。車くるま軸じくをを。漂たふ
くくららららるる。可い内ないが。拾ひひまま。束たむけ藁わらが。不どどとと。ままてて。半はん晌しやうすすらら。膝ひざつつとと
てて。憇い可い内ないハハ。とと。やくやく。膝ひざ助すけが。赤脛せきはは。湿しやく腐くせせしし。衣い服ふくをを。絞しぼむむししも

まこと編綴を脱て二人づき互に互に後まじりけし時一陣の冷氣冷透せ
バ。慄々助々ろ振慄と満身粟粒起り面のち葉葉ふりまわり
るをバ。可内アるる。慌てあつちらぶ松の枯枝枯草のたぐひ拾ひ
とり。腰は佩るる火燵袋より出見をばなくちいどくぬを携たまは
藁條の袴皮なぐくもむらじて火燵燵けて吹とじ。其の燃
るよは移し。湿衣が炎身が濕むまども。つぐりの葉葉束枯枝のこ
ふまは存るぬまらちる着物ろくし。小籠のつ可内をこねま
るく技癢て。樹の下枝のひぬまらぬ折採洞まで来るうち早
ぬまらるるまはいうふもせんまはほし。さるにりまらるるまは
濕衣とどのつち葉葉二人の面が合せうちあつるのこふて。はやし
一語を交へる精力もかく只これ越て居て居る。世の謠

しく体なきまらりの神々たたらん。頻々観音の市名が唱飲ふ
はまたる空後かきへ拳が握り齒が切ぎり耐久はびふり峭壁
靠つたの居て且ぬまらぬこの衣一枚をこも一せうも長し
おがむかくて衣とまら斜風ふりぬ。雨黙いまらり。小やうなぐ
肌いりて冷たりていつとかくとろし。せし。瀑布の音風雨のおと
まらるとまはしく。夏とへむをびあえて。やがあし。啼起つ山鴉小
ら騒る。但てまは。曉風残雲を一掃ひ東天亮々的あうくなりゆふ。
獲一輪の嫩紅昇得て看し。竿丈よふ。びらり。可内。睡り貪る
慄々助を只着ゆり記せば。慄々助。慄々助。目がそとら。阿呀一身
あく腫起り百節をぶて疼出て。其の屈伸をさへ做し。す只呻吟
よ呻吟まは。可内の光景をうらみ。一夢叫びえて。若く不

好くしくと、半晌口を塞むす果をとりて、そまくりたる。

○山寺

や、りつて五旬以後ある年紀とちりええ、最殊勝げかる禪僧頭、
一枚の竹皮をまゝに戴、牙是一套の納衣と穿左のふよよ本袴を、
のふよよ錫杖を曳て、張方ふいあくまで背高くいと弱やうなる一位の
沙彌を後へホウイと喚りつて、對面の狐屋をばして進歩を、
これを見やり、認得て頗る熟面なるふり、忙が、く穴よりそりま出て、
那の和尚の袂をひく、孔に、く地上は跪ぶと、尊者、加古の香山寺
さようといをなると、さてもしく久違やといふ、那の和尚、少停たちとど
まら、ほをしくとちりまのり、正是負道の香山寺の住持あり、
何等の人と、負道路上一時、ちりひ出さずとい、とるくふぞ、
可内、いらく下

即ハ寶刹の西村のな作が、見子小助と、せしもの和尚、
げ、ま、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
な、他、の、今、は、健、や、う、よ、て、不、斷、弊、利、も、訪、ひ、ま、ま、せ、り、
麼、幹、あり、て、這、里、を、經、過、す、と、や、可、内、四、答、て、い、ふ、や、下、從、ハ、年、比、
宇、幾、田、殿、は、奉、公、い、は、し、居、ま、し、と、嚴、穴、方、が、指、し、と、仔、細、の、侍、
て、那、の、弱、人、が、伴、ま、ひ、都、方、へ、護、送、と、ん、と、昨、日、は、い、を、經、過、お、か、ら、の、
大、風、雨、は、遇、て、一、歩、も、進、ま、が、く、對、面、か、る、草、房、が、借、て、一、枚、
さんと切よと求むと、鄙吝なうあは、じの老婢、その家よ痘やとの
児ありとて、生人な忌とふん、いひは、のり、宇下、の、ま、舎、さ、へ、ゆる、と、ん、
せん、と、ぶ、ぶ、と、弱、人、と、と、も、ふ、お、ま、さ、る、巖、穴、は、在、て、竟、夜、斜、雨、よ、う、と、
ま、い、ゆ、へ、や、今、朝、も、那、の、弱、人、あ、や、し、の、病、は、深、く、遍、身、痛、は、て

身みううここももふふここががははしし。それそれよりより下か下か下か形かたちののここ當あつ感かん仕しつつるるふふここ
面おもてううららままううちちりりててここもも悩なやままししげげよよいいひひををれればば和わ尚しょうううちちややすすててここいいとと
ここををおおううくくあありりふふんんととももいいかかくくままれれ先まそのその病やま人いににててままししとと可か内ないをを
先まよよととてて巖いん穴けつよよいいととりりててああををババ可か内ないののいいへへううててここ一い負くののふふままううけけ
たたりり美い少せう年ねん。ややここ臥ふてて蠶さとと居ゐららるる。和わ尚しょう正せい視し斜しゃ視し病びやう人にんをを相あにに
いいややををもも和わ教きやうのの灰はい屋や胎た久く老らうのの令れい即じやくふふららととやや貧せい道だうををししぶぶるる
認とん得とくししととここららあありり。襟えりをを助すけここれれをを穿うてて回わ答たををかかととんんととおおももへへとともも。
痛いた凡ふににげげままくくおおいいふふ氣きかかつつきき頭かぶどどよよ挿さけけどど可か内ないここととよよ代たてたてたいいへへらら
くく。正せい是し胎た久くととるるのの市ご子ま息そあありり。和わ尚しょう何なにととももささららししるるととももししどど。
和わ尚しょうふふ貧せい道だう當たう初しう大だい德とく寺じのの會かい下かよよままししとと死しのの普ふ明めいといいへへかか
侍こぞう者ぞうよよてて。一いつ休きゅう禪ぜん師しのの後ご子しなならら。其そのととううふふしし。ここのの師し父ふ一いつ休きゅう小せう僧そう

ううひひてて灰はい屋やのの法ほふ會かいかかどどににハハ度たひ々々行ゆくくままととありり。それそれ少すこくく息そをを
ちちもも見み覺かくてて侍しやくららひひとと。そのその時とき襟えりをを助すけハハ苦くとと息そのの下したりりももげげよよ
ここらら奉ほうししあありりしし。小せう人にん即じやく今いま路じ上じやうにに傾かたむよよかかるる雞けい病びやうをを得えてて甚しん苦く
楚そよよたたええががしし。和わ尚しょう願ねんくくハハ憐れんがが垂たたたままくく那な和わ尚しょうううちち黙もく頭とうととんん
ややここのの貧せい道だうもも近ちかひひ加か古こよりより轉てん住じゆししてて今いまハハ這こ里こよりより一いつ里りよよままりり
ぬぬ唐から猫ねこ谷たにかかるる清せい福ふく院いんといいふふ寺じにに挂か錫せきせせりり。いいごご弊へい利りはは伴ばんひひゆゆるる。
復またくく化くわ者しやく病びやう得えさせせふふんんといいひひつつててししりり技ぎけけ記きしし。那な妙めう孫そんととししてて
ここととかか負おししめめししめめししめめしし。和わ尚しょうハハひひささととししてて山さんせせららるる。可か内ないハハ洞どう窟くつとと
もも握にぎりりてて跟かかとにに隨したがひひててゆゆくく。山さん脚けつのの仄ひそ徑けいハハ巖いん巖いん灣わんももふふくく環わんりり。洞どうのの涯ぎ
はは俗ぞくへへてて躋のぼつつててままののたただだるる。痴ち雲うんのの決けつままららりりももををつつららししけけままとと。
架か梁りやうののゆゆららほほくくととびびはは肝かんをを冷ひやとと。このこの所ところよりより越こええてて又また回わ顧こ行ぎやう先せんとと

見のろしハ絶壁の半より後がけは道をはけて巖稜を削てふらし
五歩十歩げ段をおせり。おまや千早振神代の五丁が斧として造り
みせしや。はうさ内達くもまバ大きき鋸をうへはなわたりたるごとし。
実このよはまぐいひつる鋸坂といまうまう。そと登るはくして一歩の
林深き地方いゝる。鶏狗のこゝもいれて。やがて一村あり。這くうめ河
内ハ酒鬼ふまハ帘の者標せる門がな。延おしてゆれとぐ。比山市と
出くふまで。まう九折よか。まういりやう。横をまて。凡そ死あぶらふ
攀のろ。た右ふ乱山幸ひ聳ち翠壁遠けく奥のかごふ。なまき。ん
晩橋藤躑躅山吹ふどまういれて。溪水は映も。恰も錦の屍を列る
似く。中間一道の大河流る。これ但馬丹波の諸山より出る。萬谷
の落合所よて巖頭は激して逆し。と花波のま。雪よりも白。盤渦

水の底のかごり清て藍よりも碧あり。昨日の大雨よとへ湯が本ぬ。深山
の樹ぞら盤をがゆへかろべし。かろ好景かまど。ほく助い。ごれ
ふまぎ。して月ともさめ。得ど。とらうら月中。か若けてうあり。これ
るハ何所。鐘ふるらん。正は是。鐘か守て始て。覚山ハ寺と。巖すと
と岸よ到て方よ。知水村。か。隔はる。か。とい。つる。光景。なり。石梁。二
か。り。過て。密の。凹る。雨。か。盤。出づ。いま。む。瀑布。と。ん。ご。れ。ど。も。烟。樹。と
隔て。急湍の。御音。清。亮。して。人のか。骨。よ。徹。て。いと。と。じ。千。章。喬。木。の。や
か。う。よ。た。ち。こ。め。は。系。翠。衣。裳。か。深。か。せ。り。雪。の。何。の。不。ど。ら。う。老。く。と。ら。て
の。ど。ろ。か。る。目。の。け。し。さ。に。ら。か。ま。て。や。人。ま。も。ま。う。で。は。ふ。り。居。ま。り。程。
へ。ど。山。門。ふ。い。り。り。て。う。ら。作。げ。バ。寶。壽。山。の。三。大。字。か。銷。金。も。て。あ。や
か。う。た。る。堅。額。を。掲。あ。り。これ。お。ん。後。醍。醐。天。皇。の。御。宸。筆。なり。と。ぞ。



唐猫谷
 野々助
 病と養
 可



寶地慈雲繞祇林慧日遲と寫せる門聯ハ印月江の筆蹟ふるが
金碧を以てかやとぬ宮殿宏壯ふるもいづも幾許の年とかり小けん
丹青剥落いづか上人よりいづか清浄寂寞として極めて殊勝の靈
揚なり。拵は梵刹ハ大檀越赤松家の襄祖圓心公の所建立として
草創ありしといふ其時より寄附せられし寺領も今猶退轉せざ
下乗の札も馬繫も依然残まらかくて院主普明長老は蝶と助と
誘ふひつり。庫裏よりいづりて大衆も分付さまよく働らしめ
一間の乾浄なる空房を落澤ととり修らし其処は病者を擲
けりしめ。もたら新衣を借し穿せ溫柔なる卧具もて蒸しけり
湯液は餐飯し。百般信うふ心公費らるるにバ後子所代りし
松方よはととひとて丁寧よ看病る。とて那の蝶と助はくま

かくる難病が患ひしをふまば、蝶と助嚮よ宇幾田の邸よりありて
花濃う房ごもして潜し躲と日の目なご孫才咳嗽一ツ做こと
かまいど。日くく幾十の辛苦またえし。那の大力の小主公のあに
躑躅株を擲にけらる。露命ハ拾ひ得られども。赤撲の狂へる血も
あふふん。とては一日一夜大風雨に犯され。その冷濕が感るはる
かく白虎の嘔がぶと死。痛風といはるるる。し。なごての雨。暴風
をそへて。うると死んことな船祀せ。その濕氣がうるることかな。か
くて蝶と助ハ這清福院に在て。寛く保養はるるがやうやく食しそ
みん地のみや。爽げども疼痛はなぬ。幾作ありて全然かゝることなし
す。日ふよりては。し。く。あ。る。る。も。あ。り。ぬ。そのと死に河内がたの
て。病床の蒲團引をせ。端居ふととしつ。されど小房の裏面より

見やるこそきばいとゆる管して天女窺がごとくは涼谷の陰の栖居
ふまへ罪ふくて配流のふちせり。付まひ列るゝものとの細素の
伎よあつどしが只鹿猿の敷の。都は似るおとてハ空は月日の
どつとある時の雲路り尾の翼なうやまふふこのやそとふ
おどぬ山鳥のやろくと啼とやめてハ釜う媽うとうたがひあのも
はろくと涙とおとしままでおそろし山からみど梟のてふしよこ
あてれい。其西のさよをいとも方よの方ハ遠く南の溪より夏の水
とハ。岩なたみてあを溜り。谷間の本とちこめて。直ととど
西のこのまはろくとれて。觀念の便かさふもいらす。松が枝う
垂るく友波ハ波系のをなかくとどづく日けふ旬ハ郭ふとハ消息
てやまふがう空憚のせなふくむ。お静ふとハ空の月にあし

かこぬ志のひ猿の声は徒を濕とやと曉の雨とやハ本葉の尻
ふ似る。こと小てい秋うとぞあし。はが思ふ人ハかおととも志
らでやありなんがど夢さくたえづちうと。たやるせなく胸也
まどかひるし。只後愁ひよまづとて日を送りいつとこころい
るくもほし。ふもあぬ深山終るそせひふたれ。一日普明長老
蝶く助が病床ちうく居り。容躰か。尋おりてつややう。公貝道
一時遺念でありしが今しも猛まかともひ出しける。これより小二里
むりう。三鉢谷として。巴は但馬の疆内ふるが。大師の湯とて。こ
温泉あり。昔空海咒念。印をむとび。行出され。とふん。その
時擲ちし。二鉢よあうりて。鏝る岩間よりふがれ出るは。あか
靈妙不思議の名泉ふまへうかる難病といへども。一度浴るまは

強あらずとつてはとつてふげよともありけり負道這里の山村にて
 和まやうなる病悩あるもの那湯を治したるが回又や体もこの
 湯治ははしらすよと強がらよ勸めらる小ど、膝も助とれとすて
 斜あす悦び、さうはともかくもたよ又重ひたまりつとふつとこの
 志気謝せり。さて其次日ふあり、長老うひつとく世後やきや
 かて丁壯を雇来らしめ、直に膝と助を血盤に駕て、可内を後へさせ
 那三祐谷の湯場へ送り、はくはかくて膝と助ハ那里にて湯治な
 はしがるが、靈湯の強灼然、一月もかゝるやふらすばしとたえごかりし
 苦痛ふごりなく息て、精神まをし、爽やぎ、起居はねのおどく
 なりしうべとのまはさらり、可内までくはるごぶとかざりはし。さて
 すとぬ速くハ杖よとく技で、強くハ杖柄を奉とせす、意氣揚

て還来をば、満院の師徒衆一齊に喜迎てごめれたる、おににお
 て膝と助ハ長老よじうひて、再生の大恩と謝し、ぬりす帰洛をす
 ばしと、徐くそのおななをせり、一頭よ樂を以得まばす、一頭よハ
 患ぬ生ぜ、明日長老いつちよや法進の赴と、晩向ちうく回て来て、
 あとつと膝と助ハふびとて、吐息していらくふ、い、さてもろ
 てこそ奉とばらけたまろつと、頃東山殿曲水の連致と傳れ
 あり、夜陰ふおふびらりよ、ふとも、赤月の霧右衛門とつ入癖
 者、まごれりて刺客はし、あハや東山殿を殺む討ならん
 とせ、ハ、近臣赤松露三即即射よ射おし、ふもろく生捨嚴く
 因紫おうれに影の黨類どもとよ若瓜やはしらん、およ治とて
 盗出逃らせらるふらり、以の外れ發動とあり、上よ仇世し者

といひ、かゝる猖獗強盗遁させてハ申し、後大事なると、救千の
 健卒をとぐり、四方へひねらちて、雲霞穿ち草とつけて、匿捕
 せしめらるるも、いづちまがられせしやらん、その執ごよ、投ると
 あつたど、こまふりて扶桑六十州よ、口命下り、官道筋にいふよ
 おいばず、後頭橋諾あつた山みの小徑、蕪路の波、その封疆のよ
 うりく小、新開をきて、彼越獄せし、反逆の張本なる捕まん
 しの、後捕なり、いづち、這奴が黨類ともとりて、風路と求ん
 ためなり、巴、國路を交加、後客ハ、たきうしの、いづち、ななく、引と
 詢向查とあるふり、洛南の田舎よ、下より、もの、ふ、室町の公
 文所より、公文を致取て、とを、公所持はし、ま、州郡の軍民ハ、其
 主護地頭よりの信牌と、もつて出入をとると、関尹その符牌と、

の印鑑よ、引合せて、相違ふらば、ら、ぐ、は、通をこそ、致ゆせし
 みの、さうまで、ふまを、ま、和殿が、松下とも、いらは、す、い、ど、も
 領主、證文を、願は、つ、こ、い、か、す、い、は、じ、あ、り、笑、い、や、と、い、い、い、ら、る
 ぞ、嫌、助、ハ、お、ま、を、お、す、ら、ら、ら、ら、忽、比、面、人、を、お、く、可、内、と、息、見、合、
 呆、を、て、お、响、詞、は、し、院、主、う、さ、ひ、て、和、主、難、病、れ、よ、愈、て、こ、よ、度、途、の
 期、よ、の、ご、ま、去、凶、刹、那、は、降、津、ろ、こ、必、竟、過、世、の、約、束、ふ、ら、ん、
 関、と、して、し、こ、ま、で、長、く、も、あ、る、べ、う、ら、す、や、が、て、犯、人、の、動、静、も、お、れ、お、い、
 その、ま、く、関、ハ、の、ご、う、べ、し、ご、ま、を、か、ら、ま、し、それ、ま、を、ハ、弊、利、よ、
 田、あり、て、後、く、保、養、が、加、へ、ら、ま、よ、さ、ら、ら、り、嫌、助、ハ、は、ら、ら、ら、
 十、方、よ、く、ま、あ、ら、り、し、が、居、あ、つ、て、田、各、ハ、詢、よ、連、夜、累、日、市、勃、
 の、不、ご、寸、謝、し、ば、お、ま、く、ま、ら、し、感、激、は、は、ら、ら、ま、の、こ、ハ、果、し、な、ら、

土師の座
獨り
と光



土師の座

十日

歩芳煩^{あき}又^{また}あひくる。何^{なん}もそのどくのいへり。あまの長老^{ちやうらう}も、舌^{した}し
必^{かならず}じも挂念^{かきねん}らもそ。負道^{せうどう}ハ和^わまが帰郷^{ききやう}の晩^{ばん}を痛^{いた}しくなり
の。たゞいつまでも心^{こころ}おさなう、舎^ややう居^ゐらまよとけり。れハ蝶^{てつ}と
助^{すけ}まをとしその芳誠^{ほうじやう}あるがうれしとけり。おがえず吻^{くち}と一大息^{いちだいき}ハ
はごにたり。

因^{ゆゑ}より赤松露^{あかまつつゆ}三郎^{ざぶらう}と千種^{ちくしゆ}姐^{せう}の奉^{ほう}、霧^{きり}右衛門^{ゑもん}が奉^{ほう}ハ續^{つづ}編^{へん}戀^{こゝろ}
香外史^{かうがいし}より一^{いつ}くいらはす。陸^{りく}續^{じゆく}さう^{さう}本^{ほん}がうむむ

○小判

山^{やま}静^{しず}として大古^{おほこ}の机^{つくえ}より日^ひ長^{なが}りして少^{すく}年^{ねん}のほど。これハ灰屋^{はいや}蝶^{てつ}
之^{これ}助^{すけ}ハ那^な山^{やま}寺^{でら}より寓^う居^ゐて。救^{きう}の月^{げつ}日^{じつ}を送^{おく}りしが。文^{ぶん}月^{げつ}の十^{じゆ}日^{じつ}あ
こ^こ新^{しん}開^{かい}除^{じゆ}りし。行^{ぎやう}客^{かく}自^じ由^{ゆう}とほらりとす。うらとぶかざりふ

やぐて一^{いつ}叢^{そう}の香^{かう}資^しハ苗^{なへ}々^々院^{いん}主^{しゆ}の厚^{こう}意^いハ謝^{しゃ}し。今^{いま}山^{やま}の僧^{そう}
侶^{りよ}も、世^よの人情^{にんじやう}を贈^{くわ}り、まごおれに記^き出^し。重^{おも}たの意^いのあめ
され^{され}ハ記^き程^{じやう}と忙^{いそ}がしく旅^{たび}装^{しやう}と整^{ととの}へ。一^{いつ}個^この後^ご者^{しや}小^{せう}紙^し包^{ぱう}と
負^おせ。院^{いん}主^{しゆ}も別^{わか}れぬ若^{わか}てたち出^で。僧^{そう}侶^{りよ}達^{だつ}も山^{やま}門^{もん}の外^{ぐわい}石^{せき}橋^{はし}の四^しつ
まご送^{おく}り出^で。各^{おのづか}々^々涙^{なみだ}を襟^{えり}さてうららる。このときハ残^{まの}星^{ほし}と
輝^か強^{かう}月^{げつ}林^{りん}子^しに沉^{しづ}む。さて這^こ蝶^{てつ}ハ助^{すけ}ガ跟^{あし}方^{かた}ハ隨^つ教^{きやう}導^{どう}とほして護^ご
送^{おく}ものハ。彼^{かの}寺^{でら}の境^{きやう}内^{ない}から農^{のう}戸^こガ児^こ子^しあり。務^む力^{りき}あるふまうせ相^{さう}撲^{ぼく}
と好^{この}て取^とる。この疆^{きやう}界^{がい}の土^ど地^ち廟^{ぼう}角^{かく}抵^{たい}か。ハ徒^たて携^かけり
もふり。一年^{いちねん}浪^{なみだ}花^{はな}の大^{おほ}相^{さう}撲^{ぼく}ハ拘^くらも寄^よ浪^{なみだ}磯^{いそ}五^ご郎^{らう}と名^な
手^て中^{ちゆう}の幕^{まく}際^{さい}をとり取^とりし。これハ先^ま蝶^{てつ}ハ助^{すけ}ハ置^お塩^{しほ}と
伴^{ばん}あり。可^か内^{ない}ハ餘^{あま}り小^{せう}淹^{えん}留^{りゆう}とまじり。芳^{ほう}汝^{にょ}なりと盤^{ばん}纏^{ぜん}ハ

何れと費心して回し差ぬるも小うしてあのおび院を商量して
 この磯五郎落得門前の茅舎に在合致央に於てかく案内をた
 のむたるも。かくて煉く助ハ唐猫谷の秘疆をとかま。一條の盤
 徑を歩行はく。いと豁々岩稜。環て出但えまば翠を凝
 せる萬山千嶂。涛のぞく黛ののど。正よれ山外は山在て山盡
 どとて類なる。それがるし火雲々山のぞくはれを。午間暑
 おしとろれつ。まゝと行くて。土師が窪とて地方小い。僅く三四十
 戸の小村落あり。里人の総て土偶人土器般のものを造り出。これと
 齋として活業とす。この時とや午暉管笠の真上は在る。この村の出
 づれは。老槐とち覆ひ一間の食店あり。草生る宇小ハ蘆の
 簾斜に垂を。藁鞋火繩やうの種く吊しありて。袋串の干絲と

洗きたてたる麥藁束も交り。店面は安排あり煮魚のわさり
 青蠅うちよたうへとびじ村姑ハ布を組庭竈の前は破
 席敷て火を吹小厨ハ磁布の前垂を。腰は纏ひて脊戸の
 ぶくれは獨里分かく。寄波ハ煉く助は續ひて。未だ登る尻
 かけて汗ぬふととり。火鉢のひき売。烟管とさしはけて吸ふ
 うら。小厨ハ二碗の泡茶を盃に載かぐ措く。寄波声うけ。やよ
 小乙哥しやく一盤の肉と一角の酒を拿來やまといふ小厨。諾
 と應へてまゆき。聽て一陶の叙鬼春と盃。壁の下物ととり。副
 出と。煉く助はれを。俺ハ午飯喫し。とつみよ。小厨ハまゝ二配
 顆飯よ煮煎熟菜ふどつけ拿來て居へつ。煉く助やを。これハ
 喫る。償料をせんと腰袋を探し。一婚の鵜目のさぶれ。

そのまうく巻懐の財布より、一斤の円金ととり出し、こりこり引きさる
 會計して過ハ鶴目よておこりよと。膳の端よたてりけてとやま
 小厮ハこ小と領収正視助視見、あるひ日小透しふじて、這や円金
 とつふものある。吾儔ハ今がん給さる、これと這里の山家ハ見
 坊とやらんしねハねバ、見るるハなうじし。矢張後子とバやうけまん
 とつひれを、寄浪へらく。歎子。今償などの縁がわらハ、あとして
 兎金とふさんや、こ小などの村裏小。も円金とやうぬものハあふ
 まじ。とろく兎てまやとし。属々よひまをれば、村姑ハおハ事ハと
 まろと狼狽ハ、間壁よりも古怪ふる聖老生来り、何事よやと問ふ
 小厮ハ、こ小ハ那客度円金とやらんハ兎換せよし。強とつとろく
 とらまるとし、げやけバ、寄波ハ握たさる。烟後の雁首と竹の灰

吹くト、とらまへ俺が郷里くく、あまう遠くぬ封疆なる小判と
 ちんぬとハ合兵ゆらと。察する不汝寺ハ價賤ハ円判ハ兎換との
 猾計からん。角抵夥で小口とろく俺騙局ハ喫ぬと、ふ濃賊め
 と扼腕しと嘆くもバ、隣翁も百般こ小を宥め、客官さおしハ
 ろくも理なり。こ、這里ハともや丹波の地方にて、實く紗子なら
 でハ使用なり。比先京より山師の販布が来て、隣村の莊官が
 許こ夥の布を代換し、その円金をバかの莊官城下、二掌ゆれ
 税料ハ納しとろく、こハ統て鞍馬とやがの賣物ふをバ上と柄れる
 不届くわりて、吏役よりまろかよ叱らる。庄官ハ三の利ハ食らん
 として、却て損蓋をかきし、あまう、まろ、這里ハ疑して、たえそ
 円金とバより扱いどと。詳らうに物ごらひて、すこ小ハ隣り助も



寄波も吻と大息ついで「悟はし」前夜うら遣く入はどひて憇
ひ居しよのうらに「藪戸」一個の大漢「拐」一苞の鮑魚と塩俵
編薦やうのものゝを洗けたるが坐右に置一盃の茶「藤鹿」を飲
居しよし。洗とよ来て。どましく「先」その円金とや「酒家」をせらしよ
兌換ふくしてそのどくありあら。徳膳板「鬮」なる阿「諸物」貫くつりも
持て居るが。こま「丈」こても同心からハ。換てやらふとつ。喋り助ふく。こ
そのまう円金とほし出せば。那「藪戸」を救回ひぬらうは。よハ金
色青とてむゆとど外のがいろく。えせらまふといふま。蝶と助
十餘片のうちまう。まう四五両とら出。えそれをも「藪戸」の中
一片撰とつ。洗くつり収め。大事まいらうぬまふと。喃くひひ。朽不細
たる一からけの鳥目かほどき。ままか「逆」し。さらばといひとて擔物

かどげて出ゆけば。喋り助はじり左合ものども。おしひせとせらに
はあつて。とのがは「意」こしゆく。さう不どに喋り助ハ寄波と持て。藪
奥深くか入るが。山陽をさるさうハ。残暑まハ酷く。こい。瓢の中
ふて煮るが。おとくふまバ。行てハ憇と。憇てハ行不どに。まひみやう
ふも路をさるさう。大抵二三里も逾けらんと。よりハ比。時已ハ申牌
下ふちうく。赫たる炎光宛も怒まる大蛇の焰を噴うけるが
ふく。横さぬ小照はけ。遍背を艾炷して炙らうも熱し。少く
さきよ大石遮り。塞ぎて。道盡らふ。ふど。幸じて這か登るよ
日一日てう。洗けたる石ふま。炭炭と踏よ。こからハ。那里と下を
岩の皺総て画のてく。谷川の底板を敷らうさう。巖激水の盤
渦ぐる。おのづから巴字の形をふせう。そこふし。出さる石の頭を踏て

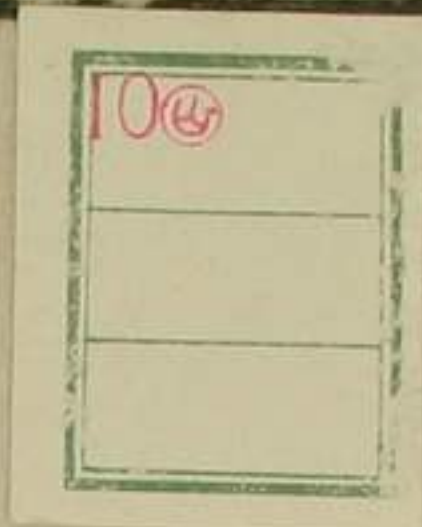
躍氣對岸よいよれば、多波推徑あり。對面の山懐よいと清凉げ
ふる緑林ありぬて喘吁たどるほけバ、岩礫うらうらと
と滴せん日かけとほしこねバ、冷氣肌は徹て使ことかざりほ。
懐く助ハ苔地は箕踞て憩へハ寄波ハ擔子を毒して息を継ぐ。
とらら西水の一隅よ、雲いりめくうら奪ひともの稻光とらめた
ころころぬ寄波うちえやり、白雨ハ但馬のかとへをるとんやとちや旅
舎も遠うらぬを、吾傳う行くこの費金はしといふとひもとてぬ。
そのらをも後面より、猿客とやくそ路残な出せ、俺這里よあ
はて待と久しと高やうよぬらうらぬを、隙く助主後赫得て魂
躰よつぎ、遷蹠づきい吾傳久旅よ盤纏竭乏十方ふられし
身の上あり、これよと仁宥はたまへと、寄波よらくとせ、一貫文の銭を

出さしめ、こもど、叩謝よこびゆる。那秀徑大ひよ喝、汝等今
盤纏はしと偽りも、俺豈ともか信然せんや、とやく頭は拳て
俺を見よ、この時二人俵うら作げ、一個の秀徑月代ハ熊の毛が
前さまにうらはけうらごごとく、蟹般の両眼を見せ、長やうたる
山刀の反うらて、巖陰より躍出、行とれを塞ぎ、まゝかつて睨つ
けらり、こも化の草冠よあらず、全然は金向充金せし獲戸なり、兩
人これをみて呆る事半晌、千衣悲美仁怒うか、とこびてややん、
とれども秀徑まらし怒り、この畜生白直見おつ、懐金米心負ま
たおしからふまゝとす、縷として身よはけとすといふぬぞ、とやく
髑よなり、衣類も逆せ、もし半点の異義ぬいと、忽地まゝ二段よ
ふしとんと、不ぞれよはどれか足撞くと踏ならし、猛烈勢頭と

做さんとせし却合ふや、那勇徑が山刀とらしと、鞆をいへ。
苔蒸崖より墜てり、寄波するより、膽斗大は發しとや、
子鬼、ごんおま、やつと、夢をけて組はけた、勇徑も倒れしと、
たぐひよ金剛力な出、と、搦合より、寄波は極めてその一影あらん、
奉に慮り、主人這や、酒家管はず、逃たまへ、廝、今の向よあげ、
殺し、後より追へと、やさん、と、やうしと、せうたてらま、せし、憎宿、
なる、慥、助、ふれを、さう、ふ、と、ふ、と、ふ、と、ふ、と、ふ、と、
ひつと、げ、ま、か、も、夾、と、逸、出、し、て、逃、ゆ、さ、し、が、餘、りの、怖、さ、に、
後、を、さ、へ、顧、み、ず、路、を、あ、ら、ふ、は、違、く、は、ま、り、に、し、し、身、瘦、を、腫、癢、
頻、り、て、汗、の、た、ゆ、を、バ、瞬、息、と、あ、る、山、の、岫、も、た、ち、憩、ら、ふ、る、ま、し、
か、と、成、回、改、い、く、光、雲、間、よ、入、萬、峰、瞑、色、よ、な、り、ま、さ、と、い、ぬ、この、わ

たりの山皆破流て骨が露いし人跡絶たる僻處なり。

龍月夜戀香繡史四終



Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or title fragment.

Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or title fragment.

